

ら離れた東側水域においてであり、道路に接した西側では、水鳥を見かけることはなかった。新しい植物たちが主に現われたのが西側水域であることを考えると、この水鳥運搬説は今の場合にあてはまらないように思う。

下ケ池の植生については過去の記録がなく、また、これら水生植物の種子や殖芽が休眠状態でどの程度の寿命をもっているかも不明であるため、この考えは推論の域を出ない。しかし、もしそうだとすれば、今年の下ケ池は、以前、このあたりならばどこにでもあったような池の植生を再現してくれたことになるのではなかろうか。

#### <オニバスについて>

播州地方には、今も10数ヶ所のオニバス自生地が残っているが、下ケ池はそのひとつであった。昨年の株数は20~30であったが、今年は、ゆうに数百株はあった。そして、生長も非常によかった。

6月になって発芽したオニバスは、7月はじめには葉の直径40cmくらいになっていた。8月に入ると葉の直径はますます大きくなり、平均的なもので120~150cm、最大のものでは180cmあった。富山県十二町瀧における270cmという記録には及ばないが、このような巨大な葉がひしめく様は壮観であった。ちなみに果実の最大ものは長さ16.5cm、幅(棘の部分のはのぞく)11cmで、果実あたりの種子数は102~191(平均134.4、n=17、展開花に由来したと思われる発育不良果実は省いてある)であった。この値は、十二町瀧のものをしのいでいる。

8月14日に、E. Schneider 博士が、オクラホマ・セントラル州立大学 J. E. Vaughan 博士とともに、東南アジアでの調査の帰路、日本に1週間立ち寄られた。その間、毎日のように、この下ケ池でいっしょに調査を行った。汗まみれ、泥まみれ、その上、オニバスの棘で

傷だらけの調査であったが、開花・結実をめぐる問題について、つぼみから受粉、受精、結実までの諸側面を、展開花と閉鎖花の比較や花(花茎)の運動なども含めて詳しく追った。

この方面の研究は、岡田要之助博士によって先鞭がつけられ、脇田晴美氏は受粉の時期について注目すべき報告をしておられるが、私たちがさらに新しい知見をいくつかつけ加えることができたのではないかと思う。その成果については、今、共著論文をまとめているところである。

下ケ池に広がる雄大なオニバス群落はもう見られなくなるが、幸いにも、池として残される部分にも今年は多くのオニバスが生えた。このオニバスたちがしぶとく生き延びてくれることを期待している。

この池を管理しておられる方と話していたとき、オニバスがこんなに生えると水が減って困るから、何とか絶やす方法はないものかという質問を受けた。オニバスの浮葉における盛んな蒸散作用のために、ふつうに水面から蒸発する分以上に水が失われ、水位が下がるというわけである。オニバスは貴重な植物であって、ぜひ保護してほしい旨を話しておいたが、高山植物の保護を理解してもらうのと同じようにはいかないようである。これは、ひとつには、この地方ではオニバスがそれほど珍しくない植物なので(つい最近までは、いたるところにあったという)、全国的にみて絶滅に瀕している植物といってもピンと感ぜてもらえないためらしい。

兵庫県南部は、現在、全国でも比較的多くのオニバス群落を残している地帯と思われるので、今後もこれらのオニバスを見守ってゆくとともに、その保護を訴えてゆきたいと思う。

#### ○オオフサモの学名(角野康郎)

オオフサモの学名は *Myriophyllum brasiliense* として長く親しまれてきたが、Verdcourt (1973) によって、これを *M. aquaticum* とすべきことが指摘された。この報告が水生植物の研究者に知れわたらなかつたためか、引き続き *M. brasiliense* が使われることが多かった。しかし、最近になって、オオフサモを *Myriophyllum aquaticum* (Vellozo) Verdc. とするものが目につくようになった。この新しい学名が定着するのも、最早、時間の問題といえよう。

[文献] B. Verdcourt. 1973. A new combination in *Myriophyllum* (Haloragaceae). Kew Bull. 28:36.

○上に紹介しました下ケ池でマルバオモダカの殖芽を大量に採取しました。かなり余分がありますので栽培してみようと思われる方がございましたら御連絡下さい。お送りします。送料として切手70円だけ御負担下さい。

〒657 神戸市灘区鶴甲1-2-1

神戸大学教養部 角野康郎